中等教育國語讀本 新材出編 巻七

4a
810
ｶ7

41709
教科書文庫
4
810
41-1918
20000
67119

資料室

文部省檢定濟
大正七年一月廿六日　中學校國語科用

42
810
大7

文學博士新村出編

中等教育國語讀本

東京　開成館藏版

広島大学
教
67119
図書

卷七　目次

一　上代の國民　芳賀矢一　一
二　門生に諭す　室鳩巣　六
三　春十句　二
四　櫻諍　三
五　晩春の別離　島崎藤村　一七
六　藝術家　藤代禎輔　二六
七　熊野落（太平記）　三四
八　千早城址　鹽井雨江　四三
九　如意輪堂（太平記）　五〇

一〇　人臣の道　北畠親房　五六
一一　日本一　六一
一二　俚諺論　大西祝　六七
一三　五倫の歌　七三
一四　我が家族制と文化　藤岡東圃　七五
一五　弟に與ふ　釋澤庵　七九
一六　混合と化合　杉浦重剛　八三
一七　尚武の氣象　德富蘇峯　八九
一八　ハンニバル　その一　矢野龍溪　九四
一九　同　その二　同　九九
二〇　夏十句　一〇四

二一　奥の旅路　松尾芭蕉　一〇六
二二　白石と宣長　上田萬年　一一〇
二三　平和　土井晚翠　一一七
二四　自彊不息　湯原元一　一一九
二五　旅順追懷　藤岡東圃　一二三
二六　乃木將軍　幸田露伴　一二六
二七　大將乃木の文藻　横山健堂　一二九

地の底
水にて体をあらふ
めうそばら
ミソギ

中等教育

國語讀本　卷七

文學博士　新村出　編

一　上代の國民

芳賀矢一

國史は神話にはじまる。神話は明に我が國體を表明し、我が國民性を反映せり。伊弉諾、伊弉冉の二神まづ大八洲の國土を生成し、尋いで風水木土の神々を産み、火神を産むに及びて、女神黄泉國に下り給ふ。男神之を追ひて黄泉に到り、女神の屍を見て、穢に觸れたりとして、檍原に禊し給ふ。この時生まれ出で給ひしは、卽ち天照大神、素戔嗚神、月讀神の三神な

御位傳ふ

德によりて從ふ

宗家

り。故に我が國土と天照大神とは正しく御兄弟にして、國土と皇室との離るべからざる關係は、之によりて明白なり。天照大神の御孫瓊々杵尊に至りて、始めてこの國土に君臨し給ふ。この時、大神は神鏡を授けて、「之を視ること、なほ朕が如くなれ。寶祚は天地と共に長久ならん。」と勅す。これ卽ち祖先崇拜の國風を言明し、萬世一系の國體を宣傳せられたるなり。

之より先、素戔嗚神は早く出雲にありて、德化を布き給ひ、今や六世大國主命の世に當れり。命の天孫の命を聽きて、その國土を讓り給ふは、大八洲の國もとよりその宗家の君臨し給ふべき地なればなり。凡そ神話にあらはるゝ天神、國神、そ

熱心にはたらく

總本家

耕す田

イミハダド

の數多しと雖も、天孫に敵抗せんとするものは一もあらず。天照大神が天の窟戸に隱れ給ふや、八百萬の神は神つどひに集ひ、神はかりに議りて、ひたすらに大神の光明の再び六合を照らさんことを冀へり。上下一致、精忠無比、君臣の分明に定まれり。天孫の後裔は、皇祖直系の繼承者として、天下公民の宗家として、長く天皇と仰がれ給ひ、以て祖廟祭祀の業を嗣ぎ給ふ。太古より今日に至るまで毫も變ることなし。

我が國の古名を豐葦原瑞穗國といふ。國民の生業は農を以て本とす。天照大神營田をいとなみ給ひ、又齋服殿を立てて、機織の業にいそしみ給ふ。太陽神としてかばかり溫和にかばかり勤勉なるは、世界の神話に無きところなり。素戔嗚神

畔をつくす
田の一所に重ねる

アハナチ
シ畔マキ
十畔

ヤ

くえひこ
山田のそゝこと

じんしよう
大じようえ

が追放せられ給ふは畔放、重播の罪に起因し、新嘗の時新宮を汚し給ひしによる。大年神、宇賀御魂神、皆農事の神にして、波邇夜須比賣、彌都波能賣等は肥料を意味す。大國主神と事代主神とを紹介せる久延毘古は、一名山田曾富騰にして、卽ち案山子なり。よつて以て農事が我が神話を一貫せるを知るべく、亦以て上代國民の生活狀態を見るべし。毎年の神嘗祭、歷世の大嘗會は傳へて以て今日に至れり。

我が國の山川は秀麗にして、我が國の氣候は溫和なり。この間に於て豐饒なる野に耕せる我が國民の生活の如何ばかり平和無事なりけんは、神話中に何等の爭奪なく、何事の紛擾を傳へざるにて知るべし。暴ぶる神の話はあれども、暴び

山の怪物
海の妖物

乱ぼう
鬼神野獸、
夜見の國
耕作して作物を最

敬ま

ばち
ぐんしよう物

カシコマリ

ケイケン
祭に持つ

はら(つもの

たる行爲はなく、魑魅魍魎の跳梁なく、鬼神獸妖の跋扈をも認めず。死して黃泉國にゆく思想あれども、死後の世の如何を語らず。樂しむところは現世にして、唯風雨稼穡の害をのみ恐る。天地の神祇を祭り、祖宗の靈魂を拜し、只管現身に禍害の及ばざらんことを求む。神の意は占にて知るべく、誓約にもあらはるべく、夢にても告げらるべし。神を祭るに敬虔を盡くせる儀容は自ら相互の間の禮節となり、神を祭るに不淨を厭ふ風は淸淨高潔の精神を養成せり。身の汚は卽ち心の汚にして、罪科之より生ず。贖物を以てその罪を償ふの風ありて、未だ刑罰のことゞしきはなし。溫和なる天然の風光を愛し、華麗なる春秋の推移を樂しみ、夫婦相和し、君臣

むぶ

相睦ぶ。その言語に毋音多くして優長なる、敬語に富みて閑雅の趣多き、自らその民性の溫和醇雅なるに相應せりといふべし。

二　門生に諭す

室鳩巣

諸君の如きは春秋に富み、材力に足る。懈らずして日に學に進まば何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず。たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにあり。もし悠々として日を渉りなば、一旦年老い、齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべき。卽ち今の翁が身の上なり。されば古詩にも

翁　鳩巣自らいへるなり。

少壯不努力。老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も

盛年不重來。一日難再晨。
及時當勉勵。歲月不待人。

といへば、古人もこの感懷を同じうすとぞ見えし。これらの詩句、時々吟詠して勇進の氣を振るひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚呼老矣。是誰之愆。

言簡にして、意も明白なり。をりふし打誦して自ら警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは陶侃が語なり。

陶淵明　名は潛。支那東晉の遺臣。
朱文公　名は熹。支那南宋の人。
陶侃　淵明の遠祖。東晉の人。

大禹聖人。乃惜寸陰。至於衆人。當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生無益於時。死無聞於後。是自棄也。

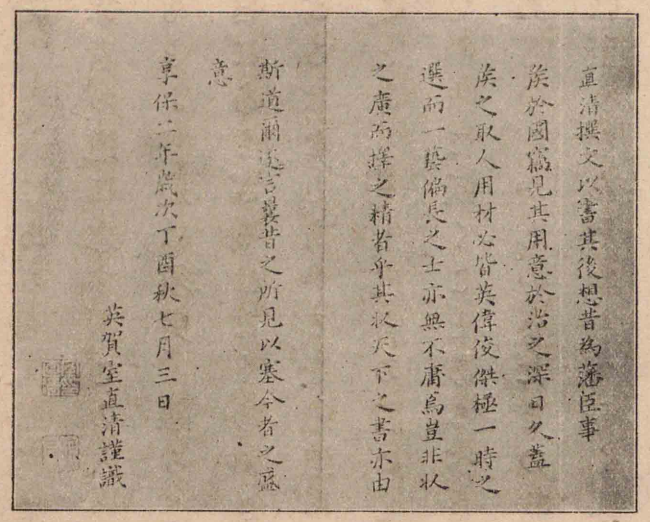
といへるこそ、學者志を立つるの法とすべけれ。前にいへる淵明が詩も曩祖以來の家法にこそとおもはる。凡そ人と生まれて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果てんは、いと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。

但學は勇進を喜ぶといへども、又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなれば、急迫にして求むべきにあらず。たゞ懈惰を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳せば、久しうし

紹鷗 武野氏。足利季世の茶人。

利休 千宗易。豐臣秀吉に仕へたる茶人。

ておのづから進益あるべし。翁昔加賀にありし時、士族の中に紹鷗、利休が風流を慕ひて茶湯を好むものありき。江戸に行役する時、道中茶具を持ちて、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂としけるを、同行の人見て、「いかにすけばとて、道中にてはやめよかし。」といへば、その人「道中の日とて一生の外にあらばこそ。これも一生の日數の内なれば、わが茶湯する日にあらずといふこ


直清撰文以書其後想昔為落臣事
矣於國竊見其用意於治之深日久蓋
矣之取人用材必皆英偉俊傑極一時之
選而一藝偏長之士亦無不膚烏豈非狀
之虜而擇之精者乎其收天下之書亦由
斯道爾逐言襲昔之所見以塞今者之惑
意
享保二年歲次丁酉秋七月三日
英賀室直清謹識

室鳩巢書

となし。家にあると何ぞ異ならん。」とて、その後もやめざりき。學者の道に志すも、この人の茶湯を好むが如くなるべし。もとより道は須臾も離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ道のあるところにあらざるはなし。志かるを急迫にして求めば、たとひ僅々の得ることありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでその胾を嚌めて滋味に飫くことあるべき。況や急迫なれば久しきに耐へぬものぞかし。いまだその時に及ばずして、やがて倦怠するに至りなん。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす。たゞ急にして迫切なるをおそる。義理は涵泳を貴ぶ。緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず懈弛ならずば、學者進修の道に於て緩急

相得て背かざるに近かるべし。

三　春十句

蕪村自畫贊　花筏

大紙鳶に近よる鳶もなかりけり　子規

東海道のこらず梅となりにけり　成美

春雨や物がたりゆく蓑と傘　蕪村

鍬さげて志かりに出るや桃の花　涼菟

おぼろ夜に光る波の上にひらりひらりと光る月魚の生れたるよう

岡にのぼれば春の野が広々とした居る春の川に流水がしつのである

青麥の上を上る下る

田を賣ったのでびふけちいのに蛙が鳴いて居るし

やしにさわる

うぐひすにぬまれて浮くや竹柄杓　鳳朗

白魚の生まるゝ夜なり朧月　紫影

菜の花や岡に登れば町とほき　虚子

流木やだぶり〳〵と春の川　鳴雪

青麥や雲雀があがるあれさがる　鬼貫

田を賣りていとゞ寐られぬ蛙かな　北枝

四　櫻諍

主人「これはこのあたりの者でござる。この頃はいづ方も花の盛りぢやと申す程に、花見に參りたう存ずれども、暇がなさに參ることも得いたさぬ。もはや暇になつてござる程に、

若者　主人の相手をする者

今日は花見に參らうと存ずる。まづ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい〳〵太郎冠者あるか。

太郎冠者「はあ。

主人「居たか。

太郎冠者「御前に居ります。

主人「汝を呼出すこと別のことではない。この頃は方々の花盛りぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつた程に、花見に出でうと思ふが何とあらうぞ。

太郎冠者「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛りぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあれば尤もでござ

るが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。

主人「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。

太郎冠者「これは賴うだ人とも覺えぬことを仰せらるゝ。左樣に仰せられたらば、人中で恥をかゝせられう。身どもは苦しうござらぬが。

主人「さて、汝がその樣にいふは子細があるか。

太郎冠者「なか〳〵子細こそござれ。はなが見させられたくば、私がはなを見させられい。他所へござるまでもござらぬ。

主人「いや、おのれは言語道斷のことをいひ居る。おのれが面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。

太郎冠者「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは讀まれたれども、花とは讀まれませぬ。

主人「なか〳〵でもないことをいひ居る。その歌を讀うで聞かせい。

太郎冠者「讀うで聞かせたらば、肝を潰させられう。

主人「急いで讀め。

櫻散る紀貫之の歌。

太郎冠者「心得ました。櫻散る木の下陰は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける』。これは何と。

主人「こちにも花といふ歌がある。

太郎冠者「さらば讀うで聞かせられい。

行き暮れて平忠度の歌。

主人「『行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし』

みよし野の　後鳥羽天皇御製。

久かたの　紀友則の歌。

櫻かざしの　今はさながら花も雪も皆白雲の上人、櫻かざしの袖ふれて、花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ。（謠曲小鹽）

太郎冠者「この方にもまだござる。『みよし野の高ねの櫻ちりにけりあらしも白き春のあけぼの』。

主人「それならこちにもある。『久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ』。

太郎冠者「それなれば、こなたには謠にござる。

主人「唄へ、聽かう。

太郎冠者『櫻かざしの袖ふれて』。

主人「一段の謠唄ふ。致し樣がござる。やい太郎冠者。『花見車暮るゝより、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ』。

太郎冠者「はあ。これでつまりました。

主人「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、

某と競合ひ居る。あつちへうせい。

太郎冠者「はあ。

主人「えい。

太郎冠者「はあ。（續狂言記による）

五　晩春の別離

島崎藤村

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
更に長きはなかるらん。

君を送りて花近き
高樓(たかどの)までも來て見れば、
緑にまよふ鶯は
霞空しく鳴きかへり、
白き光は佐保姫の
春の車駕(くるま)を照らすかな。

これより君は行く雲と
共に都を立ちいでて、
懷へば琵琶の湖の
岸の光に迷ふとき、

法皇
白河法皇。

東、膽吹の山高く、
西には比叡、比良の峯、
日は行き通ふ山々の
深きながめを伏し仰ぎ、
いかにすぐれし想をか
沈める波に湛ふらん。

流は空し、法皇の
夢杳なる鴨の水、
水にうつろふ山城の
みやびの都、行く春の

鈴鹿山
近江伊勢の國境にあり。

霞める姿見つくして、
畿内に迫る伊賀、伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望むとき、
いかによろづの恨をば
空行く鷲に窮むらん。

春去り行かば、靑によし
奈良の都に尋ね入り、
としつき君が戀ひ慕ふ
御堂のうちに遊ぶとき、

古き藝術の花の香の
伽藍の壁に遺りなば、
いかに韻を身にしめて
深き思に沈むらん。

さては秋津の島が根の
南の翼紀の國を
回りて進む黑潮の
鳴門に落ちて行く處、
天際遠く、白き日の
光を漏らす雲裂けて、

目にはるかなる遠海の
波の躍るを望むとき、
いかに胸打つ音高く
君が血潮の騒ぐらん。

又は名に負ふ歌枕、
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ、
松萬代の音にひゞく
舞子の濱の夕まぐれ、
若しそれ海の雲落ちて、

淡路の島の影暗く、
狹霧のうちに鳴き通ふ
千鳥の聲を聞くときは、
いかに浦邊にさすらひて
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯に流るゝ白波を
揚げんとすらん。よしさらば、
旅路はるかに野邊行かば

野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、天地の
もなかに遊び、大川の
流を窮め、山々の
神をもよばひ、谷々の
鬼をも起し、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、
すゞしき聲を打揚げて
朽ちせぬ琴をかき鳴らせ。

さらば名殘は盡きずとも、
袂を別つ夕まぐれ、
見よ影深き欄干に
煙を含む藤の花。
北行く雁は大空の
霞に沈み鳴き歸り、
彩なす雲も愁へつゝ
君を送るに似たりけり。

あゝ何時かまた相逢うて
もとの契をあたゝめん。

梅も櫻も散りはてて、
既に柳は深緑、
人はあかねど、行く春を
いつまで此處に留むべき。
われに惜しむな、家苞の
一枝の筆の花の色香を。

六　藝術家

文學博士
京都大學の教授
哲學者

藤代禎輔

自然には到る處に美しいものが轉がつて居る。唯我々の眼が遮られて居るから、その美を看取することが出來ぬのである。我々の耳が塞がつて居るから、その微妙な音樂が聽き

柳下惠　展禽の號。支那上古の人。
盜跖　支那上古の大盜。

取れぬのである。その我々の眼を遮り、我々の耳を塞ぎ、我々と自然との流通を妨げるものは何であるかと云ふに、それは物欲である。

我々人間は生きて行かなければならぬ。この必要は生きて行くために都合の好い方面からのみ事物を見る樣に我々を強ひる。同じ水飴を見ても、親孝行の柳下惠は齒の無い老母に喫べさせたら嘸喜ぶだらうと考へる。盜跖は之を敷居の溝に流したら、音のせぬ樣に戸を開けて甘々忍び入ることが出來ようと考へる。盜を以て世渡りの最好方便と信じる盜跖には、水飴に老母を養ふ功能のあることは眼中に無い。老母に孝養を盡くすことを生活の主要な目的とする柳

感ずる事
みのがされる

或ヶ所

下惠には水飴が盜賊のために究竟の道具であることは思ひも寄らぬ。かやうに人はその立場により、その主義により、同一物に接しても全く異なる見方をするものである。生活の目的に最も便利な方面に著眼するものである。その方面のみが我々の意識に上り、他の方面は疎外される。その人樣樣の見方が皆間違だとは云へぬが、我がための實利實益と云ふ一局部に偏してその物の特性を忘れ、その本體を看誤ると云ふことは有りがちのことである。卽ち生活の欲望によつて物の眞相特色が蔽はれ、物を看る眼が遮られることは免れ難いことである。言葉を換へて云へば、我々は物その物を見ずして、我々のためになる物を見るのである。

感ずる
空たまわりの感ん
感えてぼんやりしたもの

是は生活上の欲望から起るのであるが、言語が加ると、益、我我の心と事物との接觸が隔る。言語は固有名詞を除く外は悉く個々の物を現さずして、種を示すものである。概念を表すものである。馬といふ語は、この動物の種類全體に及ぶ語で、抽象的概念である。白馬にも赤駒にも鹿毛にも栗毛にも適用される。實際に存在するものは、白馬か赤駒か、鹿毛か栗毛かであつて、白でもなく赤でもなく鹿毛でもなく栗毛でも無い馬は存在して居らぬ。その個々の特色を沒却した漠然として極めて影の淡い觀念を代表する「馬」といふ語を吾人は平氣で用ゐて、滿足して居る。單に外物のみでなく、我々の心中に起る現象でも同樣である。嬉しいとか悲しいとか

其の人特有の性

人間として

表面の感情

ばくぜん

ぼんやり

訳のつかた字引

あやーげき

いふ感情は我々直接の經驗であつて、我々自身と切つても切れぬ深い關係がある。然るにそれを寫す言語が單に嬉しい悲しいといふだけでは、我々自身の或特別な場合、或個々の刹那に於ける嬉しさ悲しさの特色を毫も傳へて居らぬでは無いか。單に嬉しい悲しいと云ふだけでは、他人の嬉しさ悲しさと異なる所がない。萬人共通の感情である。個性を沒却した非人格的の表現である。然るに我々はその非人格的な皮相淺薄な言語を用ゐて、我々心内の微妙な作用を漠然と表現しておく外はないのである。丁度外國書を讀む未熟者が對譯字書の中から拾ひ出したいかゞはしい譯語を當てさへすれば、意味が分つて居なくても、分つた樣な氣が

習慣しをたり

のこりなく

残金なく

するのと同じく、不完全ながらも之を發表する言語を用ゐると、我が心中を寫すことが出來たとして、滿足して居るのである。されば我々に最も近い最も親しみのある我々自身に就いても、我々は其の特色を逸し去ることが多いのである。祖先以來長い習慣に囚へられ、因襲に縛られて、物欲によつて言語によつて事物と我々との接觸、否我々自身と我々の意識との接觸すら妨げられ、その眞相その特色を遺憾なく知ることが出來ぬのである。

所が藝術家といふものが折々世に現れて、我々をこの哀な境涯から救ひ出してくれる。彼等は物欲によつて耳目を遮られない。因襲習慣の奴隷とならない。事物を有の儘に看て

葛飾北齋
江戸季世の畫家。

有の儘に表現する力量を備へて居る。葛飾北齋は一筋の毛を眞二つに截ち割ることが出來たと云ふ。そのくらゐ確な眼と手とを持つて居たから、人の氣が附かない美を看取して、それを筆に現すことが出來たのである。故人荒木古童といふ尺八の名人は、知恩院の鐘の音を尺八で吹いた。それを藤村檢校と云ふ平家琵琶の名手が餘所ながら聽いて、今の笛は名人でなければ出せない音色だと云うた。後にこの兩名人が一席で出會うたをり、この事を語り合ひ、互に知己を得たといつて大いに喜んだといふ。

葛飾北齋

耳のそゝり

ふ　ふ　ふ　

あらはす

犠牲となつて苦しむ同胞を見ては、同情の念に堪へられない。そして虚偽の假面を引剥いで、正體を暴露しようとする。文藝には一面に破壞的傾向があるのは、かういふ譯である。

七　熊野落

ニホン
ハンニヤ

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚れさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隱さるべき處なし。日月明なりといへども長夜に迷へるこゝちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤

虎の尾を履む　履虎尾、不咥人亨。（易經）

夜中月ハ照シテ居ルモ寝ヨウテ居ラズ

村の辺に彳みて、人を尤むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處なかりければ、「かくても暫しは。」と思召されける處に、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。

たゞずむ　トガ

アヒヤホーゲン
一乘院　奈良興福寺の寺務門跡。

折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき樣もなかりける上、透き間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。さらばよし、自害せん。」と思召して、既に押肌脱がせたまひたりけるが、「事叶はざらん期に臨んで腹を切

護良親王自署
花押（書印）

此れでもまあ輸しわ
つ（）て居る人

だうら方一

おんぎょう

のくれるやくにうぶり

大般若経

大般若
大般若經。六百卷あり。唐玄奘三藏譯。

らん事は、いと易かるべし。若しやと隱れてみばや。」と思召し返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋を明けず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。

「若し搜し出されば、やがて突き立てん。」と思召して、氷の如くなる刀を拔いて御腹に差當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせたまひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも

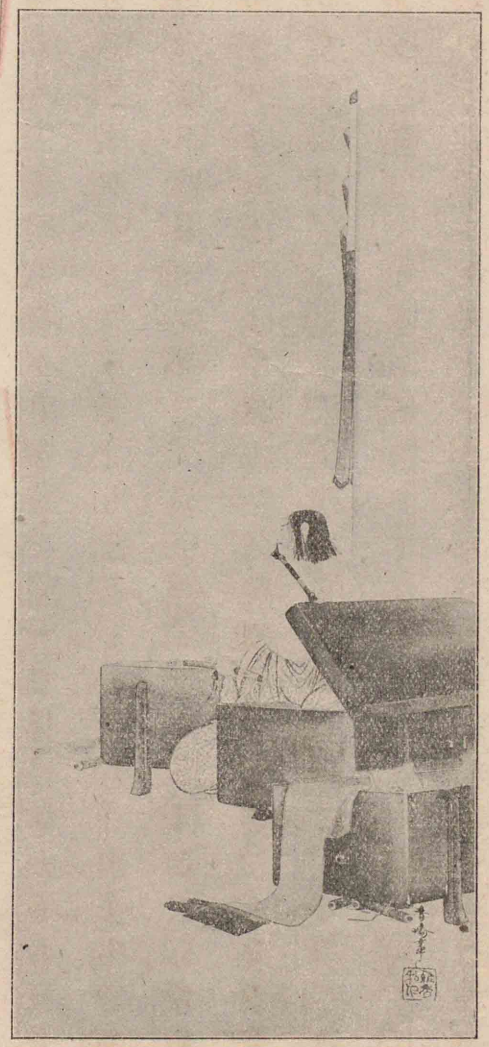
コレデイ

あるだろう

心配

殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「是體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を明けてみよ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取り出し、底を翻して見けれども、おはせず。「蓋明きたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行くこゝちして櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り、委しく搜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひてぞおはしける。案の如く兵どもまた佛殿に立歸り、「前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなし。」とて、御經を皆打移して見けるが、から〳〵と打笑うて、「大般若の櫃の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮は入

らせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戯れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ出でにける。是偏に摩利支天の



大塔宮脱危圖　谷口香嶠筆

冥應又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱れがも叶ひ難ければ、卽ち般若寺を御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、そのなかに年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげ

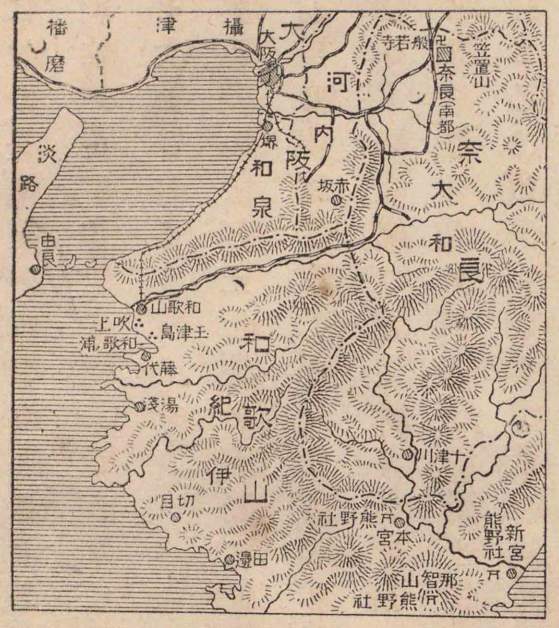
雨を含める出關愁暮一沾裳、滿野蓬生古戰場、孤村樹色昏殘雨、遠寺鐘聲帶夕陽。（盧綸）

なる單皮、脚巾、草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ涙路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と藤代の松にかゝれる磯の涙、和歌、吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光も今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申さ

熊野三山　本宮、新宮、那智。



せ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬟結うたる童子一人來て「熊野三山の間は、尚も人の心不和にして、大義成り難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待候へ」かし。兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道

山路
山路元無雨、空翠濕人衣。（王維）
見上ぐれば向上則有青壁萬尋、直下則有碧潭千仞。（遊仙窟）

指南仕るべく候ふ。」と申すと御覽ぜられて、御夢は卽ち覺めにけり。是權現の御告なりけりと憑しく思召されければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分け入らせたまひける。

其の道のほど三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身も草臥れ果てて、流るゝ汗水の如く、御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御伴の人々も皆其の身

鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に十津川にぞ著かせ給ひける。（太平記）

八　千早城址

鹽井雨江

千早城の址といふを見るに、金剛山の西南腹に當り、わがたどり來れる一路の纔に山頂に通ずる外は、谷に隔てられて、左右は山に離れ、前面は千早の村落に臨み、山高からず、坂さまで峻ならず、谷またさまで深からず。城址の廣さは、僅に數百弓に過ぎず。蓋し當年の千早城は眞にこれ彈丸の孤城のみ。

據るはこの彈丸の孤城、守るは千騎にも足らぬ小兵、而して關東の猛將精兵を盡くしたる百萬の寄手に當らむとす。太平記に曰く

千劍破の城の寄手は前の勢百八十萬騎に、又赤坂の勢、吉野の勢馳せ加つて二百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物相撲の場の如く打圍んで、尺寸の地をも餘さず充滿したり。旌旗の風に飜つて靡く景

千早城址　川端玉章筆

色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて耀ける有樣は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく處、山勢是がために動き、鬨の聲の震るふ中に坤軸須臾に摧けたり。此の勢にも恐れずして、僅に千人に足らぬ小勢にて誰を憑みいつを待つとしもなき城中にこらへて防ぎ戰ひける楠木が心の程こそ不思議なれ。

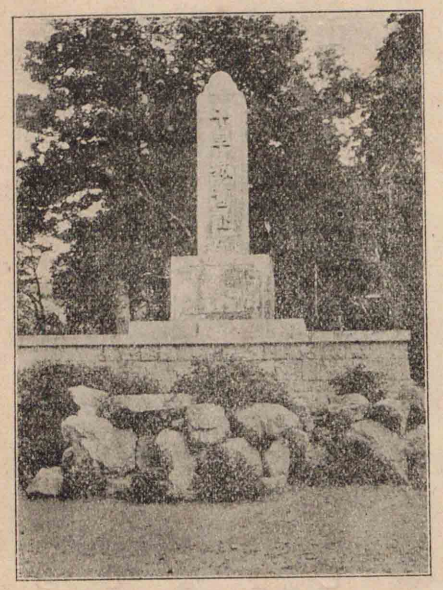
評して壯烈といふべきは、實に公が當年の意氣にこそあれ。而して、まことにこれ彈丸の孤城なりといへども、義は天下の山よりも高く、智は天下の谷よりも深く、勇氣は天下の峻坂よりも峻なる公の、これを守れるなり。宜なるかな、二百萬の賊軍もさながら烈風にむかへる枯葉の如く、敲き破られ

て天下は靡然、建武中興の王業はこゝに成る。天下人臣の業、こゝに至つて眞に壯快を極めたりといふべし。

惜しいかな、建武の王政はやく弛み、中興の偉業二年にして空しく破れ、悲しいかな、鳳輦吉野の山奥にさすらうて歸らずなりしといへども、なほ五十年、亂臣賊子に掩はれたる四海に、正統の天子の侵すべからざるを示したるは、また實にこの千早城を本城とせる公が一族の力なり。城兵僅に二十人、飢ゑて戰ふ能はざるに至つて城遂に陷りしは、實に後龜山天皇が元中九年五月、義滿の請和を聽許したまひて、車駕吉野の行宮を出でまし〳〵しはそ

楠木正成自署

の年の十月。千早城の楠氏無きに至つて、實に吉野朝廷の史は終れるなり。短しと雖も明なりし建武中興、悲しといへども美はしき南朝五十餘年の史は、實に楠氏一族が誠忠の史にして、千早城は實に其の誠忠を語る王土の一大象形文字なり。



金剛山千早城址碑

亭々たる老杉凜乎として千古の蒼色をほこる山上、地は清く拓かれて、千早城址の大碑は巍然として北方の空を壓して立つ。壯烈の正氣、肉にしみ骨にとほ

じつと目をすゑて云ふと

感（イ）見ると

りつ。恍として萬感の眼をこらせば、百八十萬の大軍を山下に迎へつゝ、莞爾とほゝゑみて立ちたる公が雄姿の髣髴として浮かび來り、寂として聲なき全山は、今や引きしぼられたる滿壘の强弩石彈、公が號令一下、忽ち迅雷豪雨となつて、山下に充滿せる賊營を粉碎しつくさむとするものの如く思はれつ。肉踊り神ふるひ、生氣の勃々渾身に湧きたつをおぼえしむ。千秋眞に懦夫をして起たしむるものありとは、此の城址の謂か。

につこりぽんやり

弓を引きしぼりとりでに居るとりでの強い弾（イ）石を綱等で

全身に勇気が湧き立つ

つまらぬものをして勇気をおこさせる

やゝ奥の方老松古杉殊に鬱蒼たる丘上に、千早神社あり。楠氏一族が忠魂義魄を祀りたるものなり。社前に跪き、謹んで禮拜して山上を辭す。

カレビ　ホウフフ　キヨウド　ボツ〳〵　コンレン　ダフ　ウフソー　チウコン　ギハク　ヒザマズク　ライハイ

村立學校

讀書の聲

本をよみ爭ふ少なき子の聲

フミ

窓をのぞくとすゝけて書いて居る語文字忠義を忘れふ

書盡きぬ思を夕分の遠くの空の雲に殘す

谷（イ）水がふくても低ければ可

美低く水のあふるゝを言ふ

やゝ下れば、一村校あり。折から咿唔の聲高く聞ゆ。何となう殊にゆかしく耳にとまりて、

千とせ清き千早の城の松風に書よみきほふをさな子の聲

讀むは何の書ぞ。忘るゝ勿れ、汝等が窓前卓として示されたる此の活文字をば。たゞ此の活文字の心を修養してやむなくんば、忠良なる臣民が才德人格は自ら汝に具るべし。

限なき感慨を暮雲に殘して、千早村に下り、右折して觀心寺に向かふ。公等一族が多年勤王の駒をかけちらしたる跡と思へば、一歩毎にゆかしさ添ふ河内路、しかも美しき山岸をつたひ、清き溪流に沿ひゆく心地、二里餘の道、たゞそれ美し

イゴ

觀心寺　大阪府河内國南河内郡川上村にあり。

カワチビ

きゆかしき夢の中にある如し。

九　如意輪堂

安部野の合戰は、霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰き落されて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助け、られて川よりひき上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脫ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療ぜしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬なき者には馬を引き、物の具失ひたる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらもその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條繩手の合戰に討死をしけるとぞ聞えし。

今年兩度の合戰に京勢無下にうち負けて、畿内多く敵に侵し奪はる。遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衞督の周章、たゞ熱を執つて手を濯ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將として、四國、中國、東海二十餘ケ國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀、八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟次郎正時二人は、一族若黨三百餘騎にて十二月二十

安部野　大阪府攝津國東成郡にあり。
霜月　正平二年の十一月なり。
四條繩手　大阪府河内國北河内郡にあり。
兩度の合戰　八月の藤井寺合戰、十一月の住吉安部野の合戰。
將軍　足利尊氏。
左兵衞督　同直義。
熱を執つて　誰能執熱、逝不以濯。（詩經）
淀、八幡　共に山城より河内へ出づる道にあり。京

都府久世郡淀町、同綴喜郡八幡町。

七日吉野の皇居に參つて、四條中納言隆資卿を傳奏にて申しけるは、『父正成、尪弱の身を以て大敵の威を砕き、先皇の宸襟を休め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西海より攻めのぼり候ひし間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかによつて、つひに攝州湊川にして討死仕候ひ畢んぬ。その時、正行十一歳に罷成り候ひしを、戰場へは伴なひ候はで、河内へかへし遣はし候ひし事は、『死殘りて候はんずる一族若黨等を扶持したてて、朝敵を亡し、君を御代に卽けまゐらせよ。』と申し置きしにて候ふ。しかるを今正行、正時、既に壯年に及び候ひながら、天下の草創を聖運の開くる所に

楠木正行自署

待つて我と手を砕く合戰を仕候はずば、かつは父が遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落ちぬと覺え候ふ。有待の身、思ふに任せぬ習にて候へば、自然にわれら病に冒されて早世仕る事も候ひなば、只君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子たるべきにて候ふ間、今度師直、師泰に對し、身命を盡くす合戰を仕つて、かれらが頸を正行が手に懸けて取り候ふか、正行、正時がくびをかれらに取られ候ふか、その二つに戰の雌雄を決すべきにて候ふ。今生にて今一度君の龍顏を拜し進らせ候はんために、參内仕つて候ふ。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる先にまづ直衣の袖をぞぬ

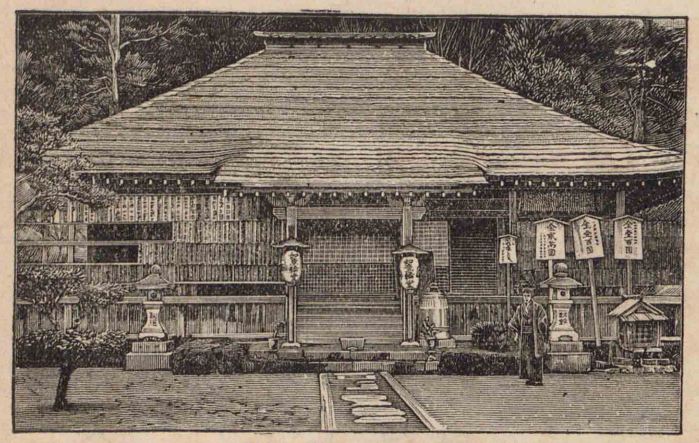
らされける。

主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔ことに麗しくして諸卒に照臨あつて、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしめ、叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵今勢を盡くして向かふなれば、今度の合戰は天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは時を失はじが爲なり。退くべきを見て退くは後を全くせん爲なり。朕汝を以て股肱の臣とす。慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行首を地につけて、とかくの勅答に及ばず、これ最後の參

内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、同新兵衛以下、今度の軍難儀なれば一足も引かず、一所にて討死せんと内々約諾したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき由の御暇を申し、如意輪堂の壁板に、各己が名字を過去帳に書き列ねて、その奥に、

歸らじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる



如意輪堂

と、一首の歌を書きとゞめ、逆修の爲とおぼしくて、各、鬢の髪少し切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向かひける。

（太平記）

一〇　人臣の道

北畠親房

およそ王土に生まれて忠をいたし命を棄つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その迹を憫びて賞せらるゝは君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、みづから

北畠親房自署

前車の轍
前車覆後車戒也。（晏子春秋）

危むる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけむかし。

中古までも人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬する事を止むべし。」といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜はりて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いふかひなき事になりにけり。

言語は言行君子之樞機。（易經）
堅き氷は履霜堅氷至。（易經）

この頃のことわざには、一度軍にかけあひ、或は家子郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「わが功におきては日本國を賜へ。もしは、半國を賜はりても足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなる。又朝威のかろ〳〵しさもおし量らるゝものなり。言語は君子の樞機なりといへり。白地にも君をないがしろにし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心言葉を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらじ。人の心の悪しくなり行くを末世とはいへるにや。昔

許由、巢父共に支那上古の隱者。
潁川支那河南省にあり。

許由といふ人は帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人、五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行く末の人の心思ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に驕るとも、萬人の恨を遺すべきことをばなどか顧ざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて限なき人に分たせ給はむことは、推して量り奉るべし。もし一國づゝを望まば、六十六人にて塞がりなむ。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況や日本の半を志し、皆ながら望

まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で面にも羞づる色のなきを、謀叛の始めといふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにや侍りけむ。昔は人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈衰へぬるにや。

北畠親房　菊池容齋筆

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖これを師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するは、この人なり。」と宣ひしかど、驕ることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討しにみづから向かふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて極めたるすくなき所を望み賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめむがためにや、賢かりけるをのこにこそ。又直實といひけるものに、一所を與へ

直實　熊谷氏。

給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり。」と書きて、賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、「褒美の詞の甚だしさに、與へたる所の少さ、誠に名を重くして、利を輕くしける、いみじき事。」と口々に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけむと、いとをかし。これまでの心こそなからめ。事に觸れて、君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありと聞えき。

一一　日本一

いつの時代にも一種の流行語があつて、その時代の反映を成して居る。吾等が幼い耳に慈母から聞いた御伽話の中にある「日本一の黍團子」や「日本一の花咲爺」などいふ場合に使はれた日本一といふ語も、その起源を探つて見ると、やはり一時代の流行語で、確にその時代の國民精神を表現して居るのである。尤も日本一などといふ褒詞は、どんな時代にでも誰でも自らこしらへて使へる詞ではあるが、それが或時代に非常に流行して居るのを見ると、その當時の國民の思潮がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかり壯んであつたらうと想像されるのである。

日本一といふ語は足利時代から德川時代の初期へかけての流行語と認められるが、その前にも用ゐられなかつたの

すべて人には枕草子に見ゆ。

ではない。優にやさしい平安朝の宮廷裡の婦人でさへ、きかぬ氣のものであると、「すべて人には一に思はれずばさらに何にかせむ。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ。」などといふ位の見識があつたのだから、日本一といふほどの考がないわけはあるまい。既に濱松中納言物語、大鏡などには日本一、日本第一といふ賞美語がいづれも二个處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると、平治物語や平家物語のやうな軍記物には「日本一の不覺人」とか、「日本一の剛の者」とかいふ文句があり、當時代の初期の文書にも「日本第一の天狗」などと見えて、段々廣く用ゐられて來たやうである。然し足利時代になると、この俗語は益、頻繁に用ゐられ、又その意

味も隨分擴張されて居るのである。曾我物語には「日本一のふかく人」といふ句が見え、義經記には「舞に於ては日本一にて候ふ。」、「日本一といふ宣旨を賜はりけると承り候ふ。」などとあり、この語が最上級の讃美語としてあちこちに使はれて居る。謠曲に見る「日本一の御機嫌にて候ふ。」、「それこそ日本一の事にて候ふ。賜はり候へ。」、「日本一烏帽子が似合ひ申して候ふ。」などの使ひざまによると、當時いかにこの語が流行したかがわかり、またその意味が大分擴がつて來たことが知れる。丁度同じ頃であらう、御伽話に黍團子をほめても日本一といひ、花咲爺をほめても日本一といひ、頻にこの語を使つて居る。謠曲に用ゐてある以上は、狂言にあるのは當然で、「日

本一の下手」といひ、「日本一の大ふ」などと見える。

要するに足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。所謂倭寇が頻に朝鮮や支那の沿岸を暴しまはつた時代である。朝鮮との交渉や支那との交通も盛んであつた時代である。その末期には、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神が發展して遂に朝鮮征伐とまでなつた。かやうに外に向かつて大いに膨脹し飛躍しようとする元氣を持つて居た當時のわが國民は、内に在つては常に覇者とならうとする氣概が熾であつた。卽ち國民が均しくかの「一に思はれずば更に何にかせむ。」の意氣を持ち、日本一、天下一、三國一とならうと心掛けたものと思はれる。

一二　俚諺論

大西　祝

一國民の言ひ慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史、氣質、風俗、人情、學術、宗教、社會制度等、一切の生活と、其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點に於て諸國民の俚諺を比較するは、いと興味あることなり。

我が俚諺の中、今卽座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、「花は櫻木、人は武士。」といふ美しき諺はいふも更なり、「武士は食はねど高楊枝。」「武士は相見互。」といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべ

く、又是によりてかゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふを見ば、千萬言の歴史的敍述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふものの勢力の如何なりしかを察知し得べく、「女人に家なし。」「貞女兩夫に見えず。」といふなどは、我が國に特生したる諺とはいふべからざれど、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべし。「さはらぬ神に祟なし。」「棄てる神あれば拾ふ神あり。」「正直の頭に神やどる。」「鬼神に横道なし。」「困つた時の神だのみ。」などは宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の縁。」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。此等は唯念頭に

浮かび出でたるまゝ數例を擧げたるに過ぎず。

一國民の種々の事件に關する特殊の感想を見んには、其等の事件を各題目として之に係れる諸種の俚諺を集め、相比較するを要す。例へば婦女子に就いては上に擧げたる一二の例の外、「女さかしうして牛賣りそこなふ。」「女は氏なくて玉の輿に乘る。」「七人の子はなすとも女に心ゆるすな。」「秋なすび嫁に食はすな。」などのたぐひ多くあり。「男の光は七ひかり。」「男は氣でもつ。」など男子に關するものも尠からざれど、女の方多く我が俚諺の題目となれるが如し。而して此等の俚諺に現れたる所にての女の面目は榮ありや否や。又歐洲諸國の俚諺にも等しく見る如く、馬鹿と坊主とは多く嘲笑の

題目となれり。「馬鹿につける藥」は何れの國にもなかるべく、「坊主の不信心。」「布施ない經には袈裟をおとす。」は西も東も同じ事か。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心子知らず。」「子を知るものは親。」「子ゆゑの闇にまよふ。」「孝行をしたい時に親はない。」「かはい子には旅をさせよ。」「子は三界の首枷。」「子が思ふよりも親は百倍も思ふ。」といふなど、親の慈愛をいひて至れり盡くせるが上に「子よりも孫はかはい。」といふ。何の言か能く之にまさりて子孫の愛のこまやかなることを發表するものぞ。

一般の人情に自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何に能く普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「くださる物は夏も御小袖。」「かたきの家にても口をぬらせ。」「轉んでも唯は起きぬ。」「泣く子も目を見る。」誠に然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。」、小を棄てて大に就け。」「長いものには卷かれよ。」「曲らねば世には立たれず。」などといふ。何れか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知つて知らざれ。」といふ。「鷹は饑ゑても穂をつまず。」など、氣概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は「かしこかれ、損をするな。」といふにあり。

俚諺は事の一面を見て之を誇張していふの傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判斷の相反するが如く思はるゝものあれど、かく兩面よりいふところ能く世態人情の實相にかなひて、其の判斷概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ。」といへど、「下手の横ずき。」といふを忘れず。「親に似ぬ子は鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の兩端を叩いて、世相の内祕、人情の裏面を穿たんと力むる、これ卽ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以なり。

同様なる意味の俚諺を集むるも亦一興ならんか。「猿も木から落ちる。」「弘法も筆のあやまり。」「智者も千慮に一失あり。」「龍馬のつまづき。」「上手の手から水がもる。」などの類多くあり。同一の俚諺をいひかへたるのの多き、「針の穴から天のぞく。」といふに越えたるはなからん。「管の穴から天のぞく。」「竹の管から天のぞく。」「鑰の穴から天のぞく。」「よしのずゐから天のぞく。」など、其の何れか一つが原始のものならん。

一三　五倫の歌

世をさまり民やすかれと祈るこそわが身に盡きぬ思なりけれ　　後醍醐天皇

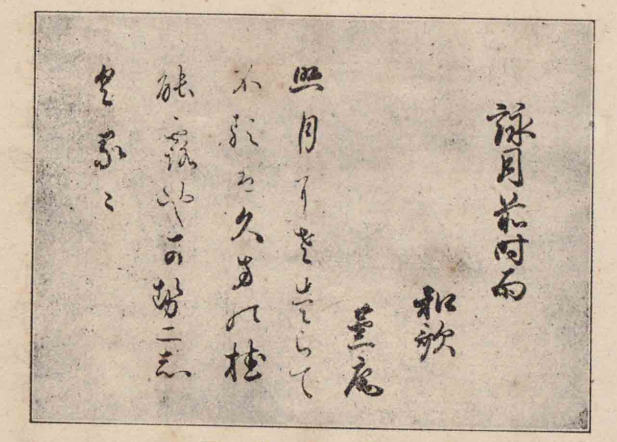
今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出で立つわれは　　今奉部與曾布

白銀も黄金も玉も何せむに優れる寶子に如かめやも　山上憶良

憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母もわをまつらむぞ

家富みてあかぬことなく仕ふとも報いむものか親の恵は　山上憶良

萬葉時代の才子流の筆致の歌聖人



みどりごを見れば涙のかずそひてありし昔ぞいとゞこひしき　小澤蘆庵

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ　伊藤仁齋

讀人しらず

下の二首は後村上天皇の住吉の行宮にいましたり東國なる御兄君宗良親王との間に贈答したまへるものなり。

年をふるひなのすまひの秋はいきど月は都とおもひやらなむ　後村上天皇

いかにせむ月も都とひかまそふ君すみのえの秋のゆかしさ　宗良親王

都には君をのみこそ思ひつれをみぢのをりも花のさかりも　橘爲仲

立つ波も心へだてぬ友千鳥まなくしばなく聲かはすなり　徳川光圀

一四　我が家族制と文化

藤岡東圃

我が國の社會は古來家族制を取り、西洋の個人制と大いに

文明發化(世の文化)

趣を異にせり。此の制度は我が國の文化に非常なる影響を與へたり。此の制度にては、社會の單位は個人にあらずして家族なり。

神武以來の政治は族姓政治なり。家によりて職業別れ、家族は同じ職業をなして代々同じ位置にあり。此の職業の世襲といふこと、家族制と離るべからざる關係にあり。家あれば家長あり。されど家長も獨立せる自己あるにあらず。自己の家といはんより、家の自己なり、父祖代々の家の一員たるのみ。かくて父子の關係は西洋に於けるよりは更に密接にして、二身同體と考へられたり。故に熊谷直實が小次郎を殺したるも、直實一人が舊主に忠を盡くす所以にあらずして、一

大膽不敵

家が忠を盡くす所以なり。一家が忠を盡くすに當りて、若し要すべくば子も死すべく、又親も死を惜しまざるべきなり。かく家系重んぜられ、血統尙ばれたれば、善行をなし惡事をなすときは、啻にその人の功罪たるのみならず、實に其の家の功罪となるなり。戰記物語に武士が戰場に出でて名乘をあぐるを見ても、自分は誰々なりといはずして、昔何々の譽ありし誰々の子孫なりといふ。かの系圖の重んぜらるゝもこれがためにして、放膽なる秀吉の如きすら、請うて豐臣の姓を賜はり、家康の如きも淳和奬學兩院別當といふが如き虛名を得て得々たりき。されば不肖の子は家の爲に勘當することあり血緣絕えしむべからずとてこゝに養子を迎ふ

ることあり。

又江戸時代以來、家に定まれる神あり、定まれる宗旨ありて、自己の信ずる神なく、自己の仰ぐ宗旨なし。家につきたる家來ありて、自己につきたる家來なし。世襲の職業は改むべからず、子孫唯之を承けて敢へて才能の適否を考へざるなり。大名武士は自己の才能によりて祿を得るにあらず、家に定まりたる地位によりて受くるなり。家老は代々家老、足輕は代々足輕なるべく、向上の心あるものは、大望を抱くもの、家の常職を破るものなりとせらる。化政時代は言ふを須たず、最も自由なる元祿時代にもなほ職業を變ふるは家の破滅なり、上を見るは不可なりと說けり。かくて家族制度は一見

化政時代　文化文政年間をいふ。將軍德川家齊の時なり。

保守的消極的なるかの觀を呈するに至れり。

要するに家族制は、個人の能力特性以上に家族の能力特性を現さんとす。是に於て規律を守りて輕々しく領域を超えず、自己を犧牲にして一家一國の爲に勞するを辭せざる氣風を馴致し、甚だ良好なる結果を齎し、特に武士の敎育に對しては最も效力を示せり。畢竟家の爲に自己を犧牲にすることは家族制の精神にして、一家に於ける自己は、獨り現在の家の自己なるのみならず、先祖以來の家、子孫までの家の自己なりと自覺せざるべからざるなり。

一五　弟に與ふ

釋澤庵

御手前萬事御才覺肝要にゐ。先書に何事も天道次第との御文尤もにゐ。其の分なる儀もゐへ共、唯天道より金銀米錢をあたへたる事はなくゐ、人の才覺にてゐ。例へば一石の米を片端より食ひはてて、其の時天道より借銀借米なるまじくゐ。何事も人間の業と御心得可有ゐ。天道は此方次第のものにてゐ。世上申す天道は杏に違ひ申ゐ。古今に蓮の葉は圓く松の葉は細くゐ。其の如く我が身に應ずる天道をよくわきまへ、小身の者は引退りて華麗をせず、大名はまたそれ程に身を持つ所、卽ち天道に任すと申ゐ。百石取る身にて二百石とる人の體、天道に背き、身に不似合の振舞をする人は、一生貧乏神

の責物にてゐ。鵜の眞似する烏は水に溺れて死する、天道の罰にてゐ。鵜は鵜、烏は烏の働、天道の本理にてゐ。か樣なるいはれを知らずして天道とばかり人毎にいうて、寢てゐても天道より食を被與ゐ樣に思ふ事、大なる誤にゐ。人は品々に世を渡る天道にてゐ。然る處細工人も定規なくてはならざるものにてゐ。人は人を定規にするがよく

ゐ。但し我が心の様なる人を定規にせば、三五の十八にてゐ。貴殿のは御分限より振廻し手廣く見え申ゐ。是は天道に御背きゐ間、つまり悪くゐ。我等申す事違ひ申すまじくゐ。冬は寒きものにてゐ。若しあたゝかならば明年宜しからず。夏暑からずば、秋萬事あしくゐ。物事に位の正しき處が天道にてゐ。大小ともに身の分限に應じて、十人抱へて可然ゐはば、七八人の心持にて後悔少くゐ。月を御覽可有ゐ。十五夜は圓満にゐへば一分づゝかけ申ゐ。これ人間の見せしめなり。

思へたゞ満つればやがて缺くる月の
十六夜の空や人の世の中

此の歌至極の理にゐ。

長文のてい、むづかしくゐへども、兄弟に生まれあひ、御爲よくゐへかしと如是にゐ。何卒風を御かへゐて、借金のなきやうに御分別專一にゐ。親類に遠ざかり親しき知音に恨を結ぶも、多分貧故にゐ。

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神や守らん

皆是にてゐ。尚期後音之時ゐ。恐惶。

一六　混合と化合

杉浦重剛

凡そ人類は單獨孤立の生活を爲し得るものにあらず、必ず

多少の親和力を以て相團結して、社會を形成するものにして、團結の程度若しくは方法如何によりては、社會の性質竝に勢力の上に一大差異を生ずるものなり。其の團結の方法たる固より千種萬別なりと雖も、概して之を混合と化合との二種に區別するを得べし。

混合と化合とは一見頗る相似たるが如しと雖も、一たび之を檢査すれば、容易に其の差異あるを發見すべし。今自然界に就きて之が例證を擧ぐれば、かの空氣の如きは、畢竟ずるに窒酸二元素の混合物にして、二元素の關係は特に親密なるものあるにあらず、唯單にその各分子が個々別々に相接近して存在するに外ならず。之に反して化合の例は水に見

るを得べし。水は吾人の知悉するが如く水酸二素の結合して成立するものなり。されど其の結合せる有樣は窒酸二素の空氣に於けるが如きにあらずして、化學的作用に依りて各分子は各其の特性を失ひ、性質の全く異なる水を形成するなり。混合と化合とは此の如き差異あり。隨つて之を破壞還原するにも、亦難易同日の談にあらず。親和力の異なるによりて抵抗力に強弱の差あるは、敢へて怪しむに足らざるなり。

之を以て社會團結の現象を推すに、吾人人類が共同生活を爲すに方りて、個人的思想のみ發達して、各個人の利益を唯一の目的として相團結するものは、恰も窒酸二素が相混合

して空氣を形成するが如く、更に他に自己を利益するに足るものあれば、直ちに去りて之と結合すること、亦恰も空氣中の酸素若しくは窒素が他の元素に觸るれば容易に空氣を棄てて之と抱合するが如し。此の如き團體は名のみにして、是唯各個人が各別の利益目的を以て雜居群棲するに過ぎず。未だ目するに國家を以てすべからざるものなり。此の如き混合的團體は團體としての勢力甚だ微弱にして、國際的國家として列國競爭場裏に立ち、其の生存を全うするの資格を有せざるは、敢へて疑を容れざるなり。

故に鞏固なる團體として前途多望なるは化合的國家ならざるべからず。化合的國家とは國家内の各個人が其の個人

的利益を後にし、國家的利益を先にして相結合するものにして、其の結合の中心は卽ち國家的觀念に在り。此の國家的觀念は卽ちかの化學的結合力と作用を均しくするものにして、一旦化合したる時は各分子は容易に遊離するものにあらず、全力を集めて一團となるものなれば、之を混合的團體に比すれば、猶五指の交彈ずるに對して一拳の打擊を以てするが如く、其の勢力の强弱固より智者を待つて後に知らざるなり。此の理を以て推せば、最强最盛の國家は、之を組織する分子たる各個人の多數若しくは强壯なるを要するのみにあらずして、完全なる化合的團結をなすを要すること、殆ど自明の理なりと云ふも、敢へて過言にあらざるなり。

果して然らば此の化合的作用を發生せしむるは、國家を組織するものの一日も忽にすべからざる所にして、是卽ち余輩が平素國家的觀念を鼓舞するの必要を說く所以なり。顧ふに我が國民は忠君愛國の至情に富むが故に、今更國家的觀念を涵養するの必要を喋々するは、殆ど無用に屬するが如き觀ありと雖も、個人的思想若しくは拜金主義は益〻其の猖獗を逞しうするの傾あり、加ふるに國家の何たるを解せざる無智の小民も亦決して少きにあらず。大いに之を鼓吹するにあらずんば、其の危險殆ど測るべからざるものあらん。是余輩の尤も恐るゝ所、混合化合の別を說きて其の利害を明にするの已むを得ざる所以なり。

一七　尙武の氣象

德富蘇峯

「寧ろ武愚なりとも文弱なる勿れ。」とは藤田東湖の語也。武愚固より不可也。文弱に至りては實に國家の大敵、片時も早く退治せざるべからず。而して此の敵や、竊盜の如く每に他の虛に乘ぜんとす。我が大和民族が後進の一民族として白晳人種と對抗し得たるは、唯彼等よりも聊か質實剛健なりしを以て也。若し一朝にして之を失はんか、我が恃む所幾許もなきなり。豈警めざるべけんや。

米國の如きは、富の病既に國內の要部を侵せり。然れども其の國は新國にして、繩墨の檢束なく、四顧茫漠、頂天立地、以て

險を冒すべく、以て勇を試るに足るものなからず。英國の如きは文明病の劇甚ならんとするを防止するに汲々として、運動競技や遊獵や登山や漕艇や、あらゆる體育の奬勵に力を盡くしつゝあり。而して獨逸に至りては、英國の競技場に行ふ所を以て之を兵營にて補ふ。獨逸の軍隊生活は固より此に止らず、要するに國民生活の一部にして、祖國を愛し、祖國に奉ずる國民的教育の仕上場所は此に存せずんばあらず。吾人が我が帝國の軍隊に多きを望み高きを責むる所以、亦此にあるのみ。

吾人は今日に於て徴兵猶豫は一切廢止すべきものと信ず。若し學校の教育が大切ならば、兵營の教育も亦大切なり。一

の大切のために他の大切を閑却すべき道理あるを見ず。今や我が青年の間には徴兵を忌避するの風未だ全く熄まず。現に我が輦轂の下に於て、徴兵免除の祈禱を以て民心を蠱惑したる詐欺師ありき。是一方に於て軍隊が理想的に市民と密接せざるの致す所なりとは云へど、他方に於ては尚武の氣象が我が社會に充滿せざるがためならずんばあらず。尚武豈戰鬪のためのみならんや。商人となるも、農夫となるも、如何なる職業に從事するも、人として缺くべからざるは尚武の氣象なり。人として有すべからざるものは文弱の惡風なり。

吾人は現時運動競技の聊か我が社會に流行するを見て、欣

快の情なしとせず。然れども若し之をして一種の興行物たらしめ、運動家をして一種の藝人たるに止らしめば、吾人は之を其の肉を尚武にして其の骨を文弱にするものと謂はざるを得ず。虎皮羊質は決して我が青年の誇にあらず。若し軍隊を國民に開放し、國民を軍隊に收容し、何人も多少軍事的訓練を受けざるなからしめ、社會を擧げて文弱を賤しみ尚武に趨かしめば、國家何ぞ必ずしも其の資本の缺乏を憂へんや。資本は輸入の道あるなり。されど勇氣は輸入の道なきなり。吾人は、資本は輸入すとも、勇氣は輸出せんことを望む。勇氣の輸出とは大和民族の海外發展是也。

尚武の氣象は徒らに外部よりの煽揚に待つべきにあらず、

富貴も淫する能はず

富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫。（孟子）

固より内的修養より來らざるべからず。然るに今日我が青年の精神的修養は如何。一方には石の如き、忠君愛國の極めて褊狹なる解説あれば、他方には毒酒の如き、人を醉はしめ人を魅する虚無、妄誕、淫逸、潰蕩の奇説詭論あり。眞に一世の智勇を推倒し萬古の心胸を開拓すといふが如き大國民の精神を教養するものに至りては、吾人不幸にして多く之を見出す能はざるを憾とせずんばあらず。

尚武の氣象といふもの、豈大言壯語、切齒扼腕、酒を飲み座を罵るものを謂はんや。蓋し富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、言ふ所必ず行ひ、行ふ所必ず果すの氣象を是謂ふのみ。

一八　ハンニバル　その一

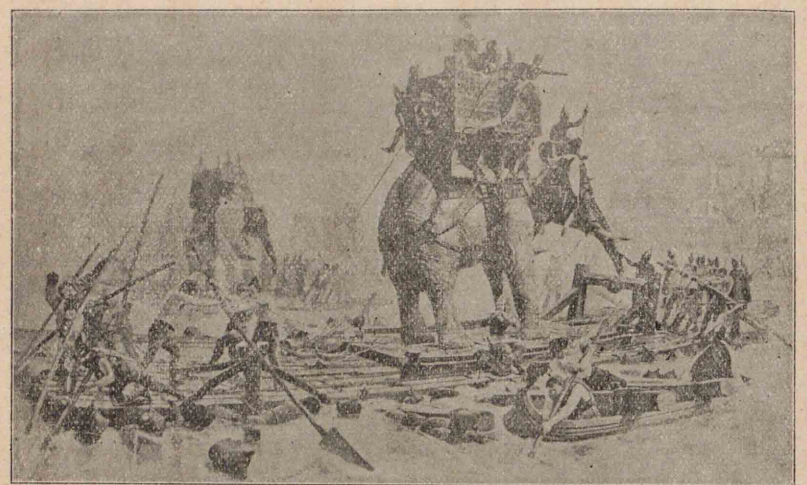
矢野龍溪

英雄の成敗は千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今を通じてハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歲の彼が其の父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより其の終焉に至るまで、彼の一念常に國讐を報ずるにあらざるなし。彼は二十七歲、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂を享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで

斃る。嗚呼、人生の慘なる復此の人の如きを見ざるなり。若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家にあらず、文ありて武なき文弱人にあらず、人格上一點の非議すべき所なく、而してその末路此の如し。是特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てて南北に對峙するものはローマ、カルタゴの二共和國なり。天は二國の兩立を許さず、彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛ならず。ロ人は戰鬪を事とする尙武

の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向かはしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは既に其の國が一たび痛擊を受けたる後なるをや。本國人の賴むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、之を以て强敵に當らんとす。事固より既に非なり。彼豈之を知らざらんや。知つてこに出づる、亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。彼が志を決してイスパニヤを發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過ぎ了へしとき、其の兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みしときは、見兵僅に二萬五千に過ぎざるなり。



ハンニバル、フランスのローヌ河を渡る

其の途上にて兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、「去らんと欲するものは去れ。從ふことを樂しむものは來れ。」と。此の時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵はイスパニヤ及びガリヤ北部の諸種の蠻族より組成

せるもののみ。決してかの愛國心燃ゆるが如きロ兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合の此の兵に對して恩威の大なるものあらざるよりは、いかんぞよく斯の如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては則ち然らず。其の將士は其の將軍に對して單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。此の異樣の兵を以てかの將來印度以西を統一すべき運命を荷なへる勇壯絶倫、愛國無雙のロ人に敵對し、一たびは幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼、此の人の外、千古復此の人あらんや。

フレデリック　百餘年前のプロシヤ王。大王の稱あり。

ナポレオン　百年前のフランス皇帝。大帝い稱あり。

カンネー　イタリヤ東海岸に近く、ローマの東南方にあり。

一九　ハンニバルその二

獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずること亦古今無雙なり。アレクサンドル、フレデリック、ナポレオンと雖も其の上に出づるを得ず。是余の私評にあらず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と强弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戰には謀略を用ゐ、正戰には戰術を用ゐたり。有名なるカンネーの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしにあらずや。しかも堂々たる正戰に於て彼は巧妙なる戰術を用ゐ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。斯の如き全

勝大敗は歴史上實に稀有の事とす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を彼の使が本國に齎し歸りて、之を國會に示せるとき、其の國人の驚喜は幾許なりしぞ。此の大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは、後人の憾むる所なりと雖も、其の兵やもと甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす。此の危道を行かずとも、一方にてイタリヤ南部の城邑は皆遙に款を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戰の夕、一部將が「我に

ハンニバル

三千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る。必ずしも後人の非議を俟たざるなり。

彼の國人は必要大切なる場合にも曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。是彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂に其の成功を誤りし大原因なり。彼の成功を最後に失ひしは、本國人民の罪にして、彼の罪にあらず。斯の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の缺を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる亦其の智略と竝行す。

彼は善く戰へり。彼は巧に外交を操縱せり。然れども其の本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで、彼を召喚して之に當らしむ。抑、既に遲し。彼の智勇も之を如何ともする能はず。しかも猶此の存亡の秋に在つて敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武將ならんや。彼をして平時に出でしめば、亦治平の良宰相たらん。

其の未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戰するや、兵寡く、食竭く。回復の望は懸けて其の實弟ハスドルバルがイスパニヤより援軍を率ゐて來り合するにありしなり。

出師未捷
出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟。（杜甫）

然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリヤの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を敍せんと樂しみたる其の人の首級は敵の槍鋒に貫かれて、遙に己が營前に現れたり。嗚呼、人生悲酸のこと多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。

彼が遙に弟の首級を望みたるとき、「我今カルタゴの運命を知れり。」と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡は此の援軍の勝敗に懸れるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長嘆せざる者果して幾人かある。「出師未捷身先死。」の五

五丈原　諸葛亮の本營のありし處。
武侯　諸葛亮。
餘杭　支那浙江省杭州府なり。
岳武穆　岳飛。

丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も亦何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩燿するがために、人或は其の名將たるを知つて其の人格を察せず。若し能く之を究めば、其の不幸を悲しむ情轉た深きを加へん。千古傷心の事、實に此の人の一生の如きはあらざるなり。

二〇　夏十句

富士一つ埋みのこして若葉かな　燕村

五月雨や色紙へぎたる壁のあと　芭蕉

滿園の露日にうごくさつき晴　子規

ほとゝぎす平安城をすぢかひに　燕村

順禮の棒ばかりゆく夏野かな　重頼

ゐづかさや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉

炎天に照らさるゝ蝶のひかりかな　太祇

雨ごひや火かげにうごく雲の峯　闌更

夜もすでに明けて水雞のゆくへかな　其角

其角筆

橋朽ちて杙一二本みづすまし　洒竹

鹽竈
宮城縣陸前國宮城郡にあり。

二一　奥の旅路

松尾芭蕉

鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしき立て、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重り、朝日朱の玉垣を輝かす。

松尾芭蕉とそのの自署

かく道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれと、いと尊し。船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯につく。

洞庭
支那湖南省にある湖。揚子江の上流にあり。

西湖
支那浙江省にある湖。

浙江
支那浙江省にある河。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ひ、二重に重り、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめ

松島　川端玉章筆

黄金花咲く
天皇の御代榮えむと東なる陸奥山に黄金花咲く（大伴家持）

られて、屈曲殊更に撓めたるが如し。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡くさん。雄島が磯に立寄るほど、月海にうつりて、晝のながめ又あらたまる。江上に歸りて宿を求め、窗を開きて風雲の中に旅寢すれば、あやしきまで妙なる心地して、眠らんとするにいねられず。

平泉へとこゝろざす。人跡稀に、雉兎芻蕘の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石巻といふ湊にいづ。黄金花咲くとよみて奉りし金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ちつゞきたり。思ひがけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更にかす人なし。やうやく貧しき小家に一夜を明して、あくればま

戸伊摩
今は登米といふ。宮城縣陸前國登米郡にあり。

三代
藤原清衡、基衡、秀衡なり。次の泰衡に至りて頼朝に滅さる。

高館
巖手縣陸中國西磐井郡平泉村にあり。

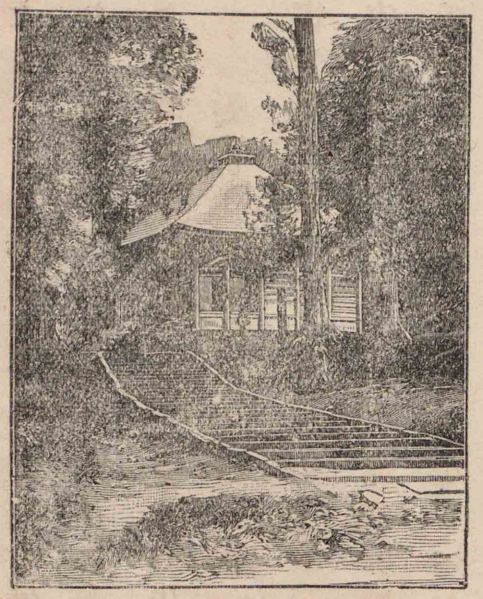
南部
今の巖手縣陸中國盛岡市あたりの地方。

泉
泉三郎忠衡。秀衡の第三子なり。

衣關
衣川關ともいふ。高館附近。

た知らぬ道まどひゆき、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は衣關を隔てて、南部口をさしかため、夷を防ぐと見え



光堂

國破れて
國破山河在、
城春草木深、
感時花濺淚、
恨別鳥驚心、
烽火連三月、
家書抵萬金、
白頭搔更短、
渾欲不勝簪。
（杜甫）

三尊
阿彌陀如來、
大勢至菩薩、
觀世音菩薩。

たり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河在り、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時の移るまで泪をおとし侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、新に四面を圍み、甍を覆ひて、風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり殘してや光堂

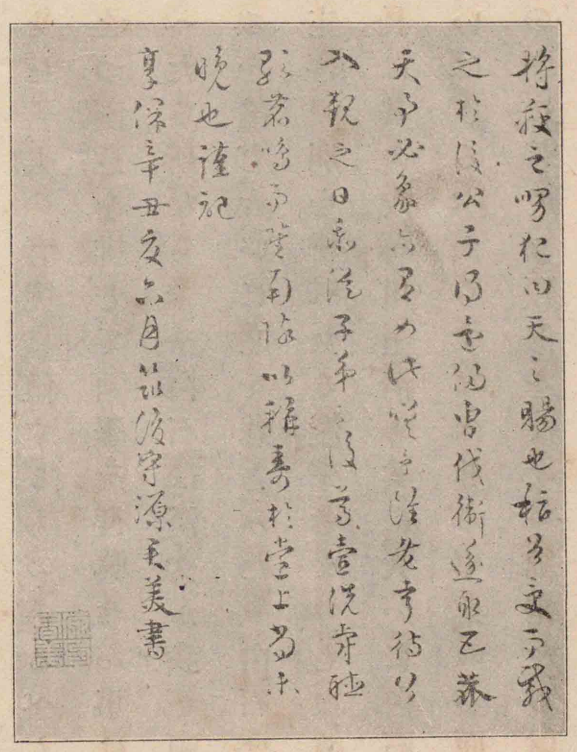
二二　白石と宣長

上田萬年

新井白石と本居宣長とは共に德川時代を飾るに足る偉人なり。この兩偉人の間に存する著しき類似と甚だしき差異とは、吾人の考究に値するものあるべし。

まづ漢意を排して國學を復興せん事は、既に早く白石の唱へたる所ならずや。白石は漢文が我が國語の發達を妨げたるを論じ、大いに之を悲しみたり。白石は漢學者なり、しかも主客の別を辨へたる漢學者なりしなり。この點より見て、宣長は其の友谷川士清と共に、大いに白石に負ふものありといはざるべからず。なほ其の事業の多面多種なること兩者の間に著しき類似をなせり。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家として、歴史家として、詩人として、さては西洋學の

鼻祖、卓見に富みたる語學家として、驚くべく多能多才なる白石は、皇學及び神道を中心として、神學者として、歴史家として、又一個の語學家として、而して又たとひ秀拔せる地位を有し得ざるにもせよ詩人として、文學批評家としての宣長と、雙々相對して我が學界に異彩を放てるにあらずや。しかも此の兩偉



新井君美書

享和　將軍德川家齊の時の年號。

人を比較して、殊に予輩の趣味を感ずるものは、蓋し他の一方に於て、奇怪にも多くの反對若しくは差異の點を認め得るによるなり。今これらの點を述べんとするは、單に興味ある事業たるのみならず、同時に又その眞面目を發揮するに必要なればなり。

白石と宣長との間に存する反對の點は、第一に、白石の峻嚴秋霜の如きに對し、宣長の溫厚春風の如きにあり。一方は廟堂に立ちて堂々の議をなし、君の忌諱に觸れて毫も顧ざるに、一方は庵を結び、鈴を鳴らして從容自適す。性格の差異驚くべきにあらずや。第二に、白石が弟子を遺さざりしに反し、宣長は全國に門弟を有し、享和年間に至りては其の數四百

九十人に及び、六十六國中弟子の無きはたゞ二箇國なりといふ。第三に、白石は政治上の偉能あり、宣長は此の方面にては殆ど無能なり。性格と時勢とは自ら此の如くならしめたるなり。第四に、兩者は同じく博學多識なれども、白石は事物の實質に立入りて、創始を喜び、啓發を事とせるに、宣長は考證を基とし、既成の事物を綜合組織するに長ぜり。讀史餘論を見よ、東雅を見よ、東音譜を見よ。前人を拔き出づる白石の創始的才能は明に見るを得べし。之に反して、記傳を見よ、玉の緒を見よ、三音考を見よ。前代及び其の同時代の學問は偉大なる手腕の下に統一せられて、後世發達の基礎の茲に置かれたるを知らん。第五に、白石は理を本とし、宣長は信仰を

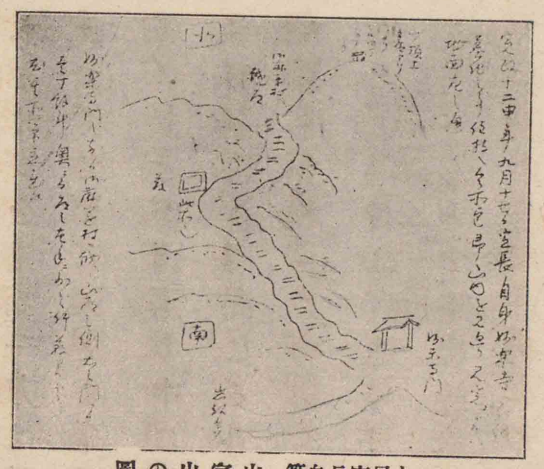
本とせるを見る。一方は科學者なり、一方は少くとも或度までは宗教家なり。彼は韓語、梵語、宋元の音、進んでは西南洋の蕃語までが國語の中に侵入したるを說き、此は鼻音を排し、半濁を說き、溷濁なる外國音の清純なる國音を侵す能はざるを說く。

第六に、白石は實地の日本に向かひ、宣長は理想の世界に進み入らんとす。讀史餘論、藩翰譜、折たく柴の記を讀んで、記傳玉勝間に及べば、著しく逕庭あることを感ずべし。第七に、一は伊勢の如き平和の地に生まれて徐かに其の學問を發達せしめ、一は江戸の如き混雜の渦中に投じて世と戰へり。第八に、其の生涯の徑路に大いなる差異ある事はいはでもあ

古河侯
堀田正俊。
甲府侯
德川家寶。

紀州侯
德川治寶。

るべし。土屋侯の一足輕の子として人を驚かしたる幼年時代と失意に滿ちたる中年時代とを送りたる後、古河、甲府二侯に歷仕し、忽ちにして天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしも、六十一歳時勢の變に遇ひ、一朝にして榮辱地を換へ、寂しく晩年を送りたる白石と、幸福なる木綿問屋の息子として十分の普通教育を受け、書を好むが故に醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して、靜に好學の心を養ひ、家には二男三女を擁し、遂に山



本居宣長自筆　山室山の圖

山室山
三重縣伊勢國飯南郡花岡村にあり。山室に千年の春の宿しめて風に知られぬ花をこそ見め（本居宣長）

室山に千年の春を樂しめる宣長と、驚くべき境遇の變化は、又その性格に差異を生じたる一の原因なるべし。白石と宣長とは、性格境遇の差異此の如く大いなれども、等しくこれ日本の人傑にして、同一の大いなる天才が兩個の極端に發達せる好例を遺せるものと謂ふべし。

二三　平和

土井晩翠

海に黃金の波をわかし、
空に焰の雲を染めて、
しづかに落ち行く夕日の姿、
見よあめつちの胸の中、

おほいなるもの彼にあり。

海にうつむく影をてらし、
空にいみじき香を吐きて、
岩かげにたつ早百合の姿、
見よあめつちの胸のうち、
うるはしきものこれにあり。

おほいなるもの光を射、
うるはしきもの色を染めて、
夕にみちたる愛と平和、

業精於勤
進學解に見ゆ。

蹇々匪躬
王臣蹇々匪躬之故。（易經）

花はかくるゝ日を慕ひ、
日はたゝずめる花を戀ふ。

二四　自彊不息

湯原元一

業精於勤、荒於嬉、行成於思、毀於隨。と韓愈が戒めしがごとく、何事を成すにも、心力を勞して勤め勵むこと最も肝要なり。この故に、古へより天子には宵衣旰食の御勤あり。官吏には蹇々匪躬の節あり。農民には粒々辛苦の勞あり。因りて以て一國榮え、一家飢ゑざることを得たり。況や國と國との間は言ふまでもなく、人と人との間にも、亦斷えず激烈なる生存競爭の行はるゝ今日に於てをや。

今歐米諸國が今日の富强を致したる原因を考ふるに、實に其の國民の荒怠を戒め、勤勉息まざるに因るもの多し。英人はその勤勉の精力に於て、獨人は其の勤勉の紀律に於て、而して佛人は其の勤勉の趣味に於て、共に遙に自餘の國民に超越し、かくて各、國運の隆盛を致して、雄を天下に稱するに至りしなり。而して西班牙、葡萄牙等が漸く其の勢力を失墜して、以上の諸國と競爭場裏に對抗することを得ざるに至りしは、其の國民の懶惰疎慵の氣風實に之が原因をなせり。又現今米國が一後進國を以て、日出の勢に乘じて先進の諸國を凌駕せんとせるも、亦其の國民が英人の血統を承け、勤勉以て時是金の格言を實行するによれり。

詔書
戊申詔書。

然れども、一時發作の勤勉は眞正の勤勉にあらず。眞正の勤勉は、終始一貫の誠意に基づき、是を自己の生命となすの覺悟あるものたるを要す。詔書に見ゆる自彊息マザルベシの大御言は、卽ち此の意を諭し給ふなり。蓋し苦樂は相對の意味にして、世に絕對の苦樂あるにあらざるなり。人或は安息を以て樂となし、勤勞を以て苦となせども、決して然らず。ゲーテは萬事急ぐべし、唯絕對の無事は急ぐべからずといへり。眞に此の言の如く、無事は實に一種の苦痛にして、安樂にはあらざるなり。抑、人間の身には四肢あり、又其の心には理性あり。これ天意既に其の身心兩者の共に働かんことを欲せるなり。されば、若し此の天意に違ひて、徒らに安息を求め

ば、之が天罰として無事の苦まづ到り、尋いで身心上幾多の障碍を來すべきは、自然の理法のみ。かの富貴にして何等不足なき輩が、却つて常に身體の不健康と精神の不愉快とを訴へ、山に入り海に浴して其の苦痛を散ぜんとして、而も毫も效なきを嘆ずるものは、卽ち彼等が勤勞の眞意を解せざるに因るなり。

之を要するに、人間の勤勞は天意に順ふものにして、其の懶惰は實に之に背反するものなり。易に、天行の健なるが如くに君子の自彊せんことを勸むるも、亦寔に其の所以ありと謂ふべし。

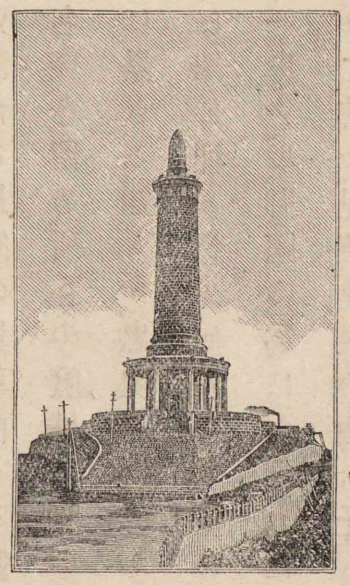
天行の健
天行健、君子以自彊不息。（易經）

二五　旅順追懷

藤岡東圃

荒涼たる劫餘の景、草白く、石露はなり。到る處の殘壘奮戰の名殘を留め、所在の廢墟苦鬪の痕を貽す。白骨狼藉空しく雨に暴さる。知らず、忠魂那邊にかさまよふらん。折戟散亂徒らに地に埋る。想ふ、何者の勇士の形見ぞ。心なくわが踏む土の一歩一歩、御國の爲にと濺ぎたる我が同胞の血潮の河と流れし跡よ。見渡す限の山も丘も、大君の爲にと捧げし我が同胞の折り重れる屍にや蔽はれたりけん。彼方の谿間、茲にや露營の霜寒く、明日知れぬ身を横たへて結びがての夢の故郷を遶りたる。此方の丘上、茲にや痛傷の兵士が無念の聲も

たえ〴〵に刻一刻と迫り來る死をや待ちたる。四顧人なく、悲風只淅たり。眼を閉ぢて佇立すれば、喊聲を砲聲と和し、劍光を硝煙に閃かして、創を裹み血を啜り、僵るゝ死屍を踏み越えて、躍進突貫する我が兵の當時の狀、恍として睹るが如きを覺ゆ。



旅順表忠塔

嗚呼旅順、此の二字は曾てこれ我が國民が悲憤と敵愾との呪語たりき。今や此の一地名は我が國民の名譽と光榮との標號たらんとするなり。蓋し旅順の捷は、啻に敵の生理的體力と鬪ひて克ちたるのみに非ず、その心理的精力と鬪ひて亦之に克ちたるなり。獨り風雨寒暑の自然力と鬪ひて克ちたるのみに非ず、敵の銃砲、塹濠、坑道、鐵條網、あらゆる機械力と鬪ひて亦之に克ちたるなり。卽ち我が國民の武力、智力、精力の傾倒にして、而して又その勇氣、膽氣、義氣の發揚なり。その裂け飛べる一片の石にも、盡く我が國民の忠勇と義烈とを刻み、その崩れたる一寸の土にも、悉く我が帝國の優秀と偉大とを銘せり。嗚呼旅順の山、旅順の水、その山の有らん限、その水の盡きざらん限、この地は長へに我が國家我が國民の名譽と光榮とを表彰する記念碑たるべし。而して我が國民は、その身を擲ちその生を捨て、その肉と血とを以てこの記念碑を彩りたる

奮鬪者忠死者の功に對して感謝と崇敬との念を忘るべからず。彼等は實に國光の發揮者たり、はた世界平和の擁護者たるなり。

俯仰低回、無限の感慨を懷いて、獨り落暉に立てば、孤影長く地上に曳いて、衣袂風に冷なり。

二六　乃木將軍

幸田露伴

生あり。死あり。

生きて死せるあり。死して生けるあり。

生ぜしめられて生じ、死せしめられて死す。之を天地間の遊塵となす。生きて而して未だ曾て生きず、生きて而して既に死す。之を酒肉間の行尸となす。

死して而して未だ曾て死せず、死して而して猶生く。之を神とし、鬼となす。

神は伸なり、一氣伸びて而して存す。之を神となす。志を遂げて而して死して永く生く。卽ち是神なり。

鬼は屈なり、其の志屈して而して泯びず。之を鬼となす。志を抱いて而して死して死せず、卽ち是鬼なり。

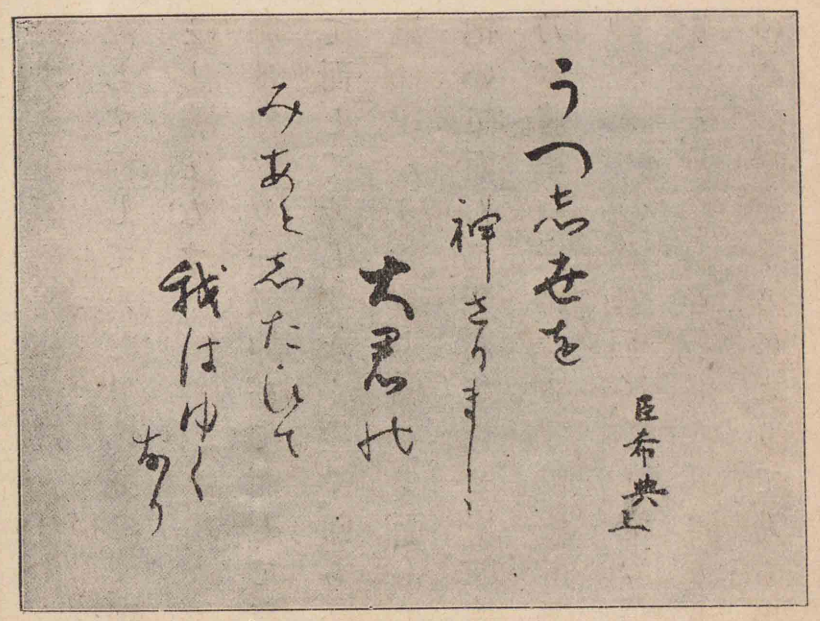
乃木將軍は夫神なる乎。神乎。神乎。神也。

神や死せず。經に曰く、我もろ〳〵の衆生の苦海に沒在するを見る、故に身を現すを爲さず、其をして渴仰を生ぜしめ、其の心の戀慕するによりて、乃ち出でて爲に法を說くと。又曰

經に曰く
我見諸衆生、沒在於苦海、故不爲現身、令其生渴仰、因其心戀慕、乃出爲說法。
（法華經如來壽量品）

常に悲感を懷き　常團悲感、心遂醒悟。（同上）

實は滅度せず　爲度衆生故、方便現涅槃、而實不滅度、常住此說法。（同上）



乃木希典書

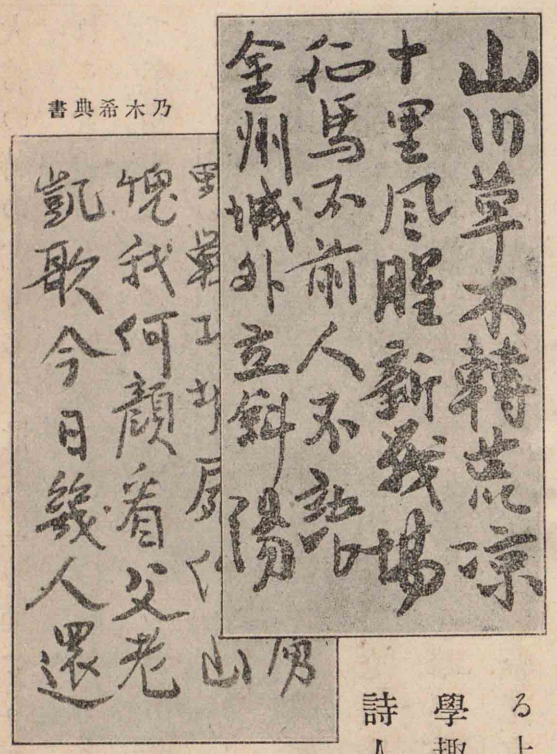
く、常に悲感を懷き、心遂に醒悟すと。將軍自ら死して人皆將軍を懷ふ。將軍乃ち不說を以て道を說き、人皆不聞を以て敎を聞く。實は滅度せずの言の虛しからざるを見る。

將軍に於て壽量品を讀み、壽量品に於て將軍の死を觀るべし。

二七　大將乃木の文藻

横山健堂

横槊賦詩は武人の氣品、愛すべし。大將乃木は漢學の修養ある上に、獨逸語を學び、漢學趣味の一偏に落ちず。詩人といふにはあらざれど、其の詩直ちに性情を發露して、自然に神韻あり。我が陸海軍人中の詩人たるを失はず。



乃木希典書

大將の詩の尤も多く世人に傳誦せらるゝもの三あり。いづれも大將の人格、運命と密接の關係を有し、今に於て人をして卒讀するに堪へざらしむるものあり。金州南山を過ぎて愛兒を弔ふの詩、悲しんで傷まず。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。
征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

見よ。馬上、白鬚の老將軍、孤影悄々、暗涙を飲んで邊塞に夕陽に立つ。其の光景を冥想すれば、滿幅悲哀の詩也。畫也。大將を言ふ者、此の詩を知らざるは無く、言はざるは無く、諷詠一世に遍し。蓋し菅公、謙信、山陽、三樹、南洲諸人の傑作と共に、國民傳誦詩の中に數へらるべし。

大將の詩は詩人の性情あり、興趣あり。文字を驅使するの技巧も亦見るべし。啻に其の人物を以て傳るのみにあらず。固よりかの尋常劍舞詩と一樣なるものにあらずと雖も、其の人、其の詩、共に世上に熟知崇拜せらるゝの餘、恐らくは大將の傑作は遠からずして悉く劍舞詩とならん。國民必傳詩は概ね劍舞詩とならざるは無き也。

大將の詩は大將の人格也。滿洲軍凱旋の時の作は大將の烈烈たる精神を尤も率直に表白せるもの也。

王師百萬征驕虜。野戰攻城屍作山。
愧我何顏看父老。凱歌今日幾人還。

これ詩人の詩語にあらず。大將は遂に此の志を實行したる

也。

大將の詩は大將の理想也。宣言也。大將は常に其の理想を宣言し、斷々として萬難を排して實行する人也。故に其の言光焰あり。而して其の詩神韻あり。大將の詩を諷誦すれば、おのづから其の人を嘆美し欽慕するに至る。吾輩は尤も爾靈山詩を愛す。

爾靈山險豈難攀。男子功名期克艱。
鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。

氣象雄大、攻圍軍を擧げて此の意氣ありて、旅順始めて陷落せしむべし。此の詩や則ち日露戰役中の詩の壓卷を以て推稱せずんばあらず。以て古今の大苦戰を記念するに足るべく、また以て國民を鼓舞作興するに足らん。

題爾靈山圖　乃木希典筆

吾輩を以て見れば、大將の詩は古今武將の中多く其の匹を見ず。近世に於ては大西郷以後の第一人たらずんばあらず。南洲の詩は豪宕、大將の詩は清高。彼のは多くして此のは少く、彼には包容あり、此には超越あり。一は燦爛たり、一は閑雅たり。此の二人者の詩は、之に對すれば櫻と梅との趣味の相違ありと雖も、共に維新

以來我が武人の詩の傳誦すべきものたり。恰も此の二大人格の大と高と前後に冠絶するが如き也。

中等教育國語讀本　卷七終

大正六年十月十七日印刷
大正六年十月二十日發行
大正七年一月七日訂正再版印刷
大正七年一月十日訂正再版發行

中等教育國語讀本
定價
卷一、二各金參拾五錢
卷三、四各金參拾貳錢
自卷五至卷十各金參拾錢

大正七年度臨時定價
卷一、二各金四拾錢
卷三、四各金參拾七錢
自卷五至卷十各金參拾五錢

著作權所有
本書原圖
不許轉載
嚴禁轉載

著作者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　新村出
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　西野虎吉
印刷者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　野村宗十郎
發行所　【振替貯金口座】東京第五參貳貳番　開成館
西部販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

（株式會社東京築地活版製造所印刷）